

平城京左京三条一坊一坪の調査 (平城第488次)

平城京左京三条一坊一坪は、平城宮の正門である朱雀門のすぐ南東に位置します。史跡平城京朱雀大路跡に隣接する緑地公園として整備されていたこの場所に、国土交通省が平城宮跡展示館を建設することとなり、昨年から奈良文化財研究所が継続して発掘調査をおこなっています。

この坪は1986年から1996年に奈良市教育委員会等によっておこなわれた発掘調査によって、築地塀等の坪を取り囲む遮蔽施設をもたないこと、坪を南北に二分する幅約9mの坪内道路があり、木橋によって朱雀大路と結ばれていたこと等が明らかとなっていました。

また、奈文研が2011年秋におこなった調査では、奈良時代前半につくられた大型の井戸や、平城宮造営時にまで遡る可能性のある鉄鍛冶工房群の存在を確認する等、予想外の成果をあげました。今回の調査区は秋の調査区の南側に位置し、坪のほぼ中央にあたります。調査面積は1,584㎡、調査期間は2011年12月22日から2012年3月30日です。

調査の成果は、北側でみつかった鉄鍛冶工房群が続くのでは、という私たちの予想とは異なるものでした。すでにその存在が明らかとなっていた坪内道路については、今回もその南・北側溝を約44mに渡って検出しましたが、この道路が造営される以前に、複数の南北棟建物が建ち並んでいたことが新たに明らかとなったのです。その中には南北4間(約12m)以上×東西3間(約7.2m)の巨大な総柱建物や、南北7間(約21m)以上×東西2間(約6m)の廂をもつ長大な掘立柱建物が含まれています。各建物の東西の柱筋は揃っており、同一の設計基準によって計画的に配置されていました。また、鉄鍛冶工房群は、坪内道路よりも南側には続かないことも明らかに became しました。くわえて工房に由来するとみら



調査区全景 (南東から)

れる炭が混じった整地土が道路の下層でも検出されたことから、工房の操業時期も坪内道路造営以前に遡ることが確定しました。なお、今回の調査区内では坪内道路と同時期、あるいはそれよりも確実に新しいといえる遺構は確認できませんでした。坪内道路造営以後は広場のような空地として朱雀門、朱雀大路と一体的な空間を形成していたようです。

今回新たに確認された建物群と、北側の鉄鍛冶工房はいずれも坪内道路造営以前の遺構であり、両者の間に遮蔽施設等はありません。建物の構造や規模からみても、同時期に坪の北側に展開した鉄鍛冶工房等の現業部門に対する事務・管理部門の可能性が高いといえるでしょう。また、建物はいずれも掘立柱であるにもかかわらず、建物間の重複(建てかえ)がほとんどみられないことから、これらの建物群の存続期間は比較的短かったようです。興味深いのは長大な掘立柱建物の柱穴からみつかった柱根です。長さ60cm、直径20cmの柱根が、柱を立てるために掘られた柱穴(柱掘方)の底面よりも20cmも沈み込んだ状態で出土しました。奈良時代以前には自然流路が通る等周辺の地盤は軟弱であったと思われます。その上に十分な地業(地盤改良)をせずに大型建物を建てたために、柱が自重や建物の荷重によって沈下した可能性があります。

朱雀門の目の前に位置するこの一角に、大型建物群を急ごしらえて建てた理由はなんだったのでしょうか。建物群は調査区の南へさらに続いていくことがわかっています。その答えは、今後の南側の発掘調査によって明らかになるでしょう。

(都城発掘調査部 諫早 直人)



掘立柱建物の柱穴(柱根が柱掘方よりも深く沈下している)